

書 評 と 紹 介

石川准・長瀬修編著

『障害学への招待』

評者：岩崎 晋也

1 はじめに

「障害学」という学問が、近年イギリス・アメリカを中心に盛んになっている。本書は、そうした英米の研究動向を紹介するとともに、我が国の障害をもつ人が、既存の社会・文化に対して異議申し立てをし、新たに創造してきたこれまでの取り組みを、「障害学」という切り口でとらえなおそうという野心的な試みの書である。

そもそも障害学とは何か。本書では以下のよう

に定義がなされている。
「障害学(ディスアビリティ・スタディーズ)とは簡単に言えば、障害、障害者を社会、文化の視点から考え直し、従来の医療、リハビリテーション、社会福祉、特殊教育といった『枠』から障害、障害者を解放する試みである。」(はじめに p.3)

「障害学、ディスアビリティ・スタディーズとは、障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動である。それは従来の医療、社会福祉の視点からの障害、障害者をとらえるものではない。個人のインペアメント(損傷)の治療を至上命題とする医療、『障害者すなわち障害者福祉の対象』という枠組みからの脱却を

目指す試みである。そして障害独自の視点の確立を試行し、文化としての障害、障害者として生きる価値に着目する。」(第1章 p.11)

ここでキーになっているのは、医療、社会福祉、特殊教育といった既存の障害に関わってきた学問からの解放・脱却であり、社会や文化と障害を持つ人との関わりを、障害を持つ人の視点から分析するという点であろう。本書評では、各章の内容を紹介し、「障害学」が具体的にどのような新しい問題、視点を提起しようとしているのかを明らかにするとともに、「障害学」の今後の可能性について論じたい。

2 本書の概要

本書は、10章で構成されている。

第1章「障害学に向けて」(長瀬修)は、なぜ「障害学」という視点が必要なのかを主題に、英米における障害学の現状の紹介や、我が国で障害学を提唱するに至った経緯が記されている。まず障害学の理論的成果として、社会モデルの成立を取り上げている。社会モデルとは、従来の個人モデルや医学モデルとは異なり、障害の問題は、自分の身体にあるのではなく、障害者を排除する社会が生み出したとする視点によって形成されている。よって、問題の解決は、障害者個人への介入ではなく、社会・環境の変化によってもたらされなければならないと指摘するものである。さらに社会モデル成立以降の研究動向を紹介している。本章ではそれに加えて、我が国において必ずしも「障害学」として意識されてこなかったが、それに通じる論争や「ろう文化運動」といった実践を紹介し、「障害学」が今後発展していく可能性を指摘している。

第2章「障害，テクノロジー，アイデンティティ」(石川准)は，被差別者としての障害者のアイデンティティ(存在証明)の問題を論じている。常に存在証明を要求する近代社会において，既存の価値体系に価値づけることが困難な障害者がとりうる5つの方法を示している。この5つの方法は，大別すれば，既成の支配的な存在証明の体系に従属する戦略と，既成の価値の相対化と価値増殖をもたらすかもしれない新しい価値を創造する戦略(「価値の取り戻し」「存在証明からの自由」)に分けることができる。そして後者の戦略には，アイデンティティ問題を解決する手段という意味を超えて解放と共生の思想へと昇華する可能性を含むと論じている。だが後者の戦略をとるためには，これまで信じていた(信じ込まされていた)価値体系を捨てて，「心を作りなおす」プロセス，命がけの「感情管理」が必要になる。最後に，テクノロジーの進展が，障害者のアイデンティティ問題に与える両義的な影響を論じている。ユニバーサル・デザイン，バリア・フリー，アクセシビリティをもたらすテクノロジーは，障害者が同化しやすい社会にデザインしなおす点で，障害者を健常者社会に同化させる試みであり，障害者の固有の文化を奪う側面がある。しかし一方でテクノロジーは，障害者が自らの言語や思想を紡ぎ出す上で有効な道具となり得る側面があり，思想(文化形成)とテクノロジーを排他的にとらえる単純な図式ではとらえることができないことを指摘している。

第3章「自己決定する自立」(立岩真也)は，まず「自立」や「自立生活」という言葉が，1970年代アメリカの自立生活運動(Independent Living Movement)に影響を受けた訳語であるという一般的言説を否定し，我が国の障害者運動の歴史においても，1970年以降アメリカと同様の運動があったことを指摘して

いる。こうした歴史的事実が抹殺されたのは，「自立生活」を訴えた障害者運動とは直接的なつながりのない研究者・専門家が論文で「自立生活」を論じたからであり，さらに専門家批判をする障害者運動との政治的対立という側面があったことを指摘している。次に，「自立」と「自己決定」の意味づけについて，日本においては，単純に肯定するのではなく，そこに懐疑やためらいがあったことを指摘している。まず，「自己決定すること」は常によいことではなく，第一義的でもない。決定しないことの快という側面や決定したくないことの決定を強制される不幸という側面を見落としており，決定できることが人間としての存在要件ではない。しかし，一方で「自己決定」は以下の点で肯定される。第一に，「決定しない決定」も含めて，生き様を決定すること自体が，その人の存在を構成するものだからである。第二に，自分にとってのよい状態は自分が知っており，他人の利害から自分生活を防衛するためにも「自己決定」が必要である。このように「自己決定」は，「なにより，ではないが，とても，大切なもの」として位置づけられることを指摘した上で，最後に「自己決定」や「自立」を教育し，支援する際に生じるパターンリズムの問題を論じている。

第4章「『障害』と出生前診断」(玉井真理子)は，出生前診断が必ずしも選択的人口妊娠中絶(障害児の出生を回避するための中絶)を前提として行われるものばかりではないが，選択的人口妊娠中絶の問題が出生前診断を語る上で不可避な問題であるとしている。遺伝子レベルでの検査による診断がなされても，必ずしも治療や予防に結びつかず，選択的人口妊娠中絶にのみ結びついているものがあるのである。そうした検査や中絶は，生まれてくる障害者「本人の不幸」と「家族の負担」によって正当化されているが，その背後には新優生学にみられる社会

防衛的思想が根強く存在していることを指摘している。さらに、仮に治療や予防可能な検査であってもそれを肯定することは、障害はない方がよいとする否定的な価値を前提にしているとの問題提起を行っている。

第5章「優生思想の系譜」(市野川容孝)は、優生学の根底にある障害全般や治癒不能な疾患一般に対する敵意と不寛容がいかにして生まれ、正当化されてきたのかを見極め、その上で、これらに対抗しうる別の価値観を模索するということが、障害学の課題の一つであるとしている。まず古代ギリシャのプラトン、アリストテレス、ヒポクラテスを取り上げ、個の前にポリスが存在するという全体主義が、身体の価値をポリスにとって有用か否かで判断することにつながり、優生政策を正当化したことを指摘している。次にユダヤ教とキリスト教を取り上げ、古代ユダヤ教においては病や障害は道徳的な罪を犯したものに対する神の罰と解釈されていたが、イエスはその解釈(意味付け)を、すべての人が「原罪」を負っているとすることで破壊したと述べている。このことによりキリスト教は、優生思想に対抗しうる思想的基盤となりえたと指摘している。次に近代の社会契約説を取り上げている。社会契約説は、古代ギリシャの政治哲学を逆転させ、国家より個人を出発点とする個人主義に基礎を与えた。とすれば古代ギリシャ流の優生思想は根拠を失うことになるが、新たな全体主義(自然状態における淘汰の肯定)と、さらには個人主義自体が、優生思想に新たな正当化の根拠を与えたと論じている。自立能力をもつ者には自由を与え、自立できず他人の理性に依存しなければならないものは、「低価値者」として強制的な優生政策の対象となったのである。そして、このような正当性を具備した優生思想は、国家が国民の生活を管理する福祉国家において具体的な政策として展開

が可能になる。つまり近代社会における優生思想は、「自然」「近代的個人(主体)」「福祉国家」という一見相反するモメントによって支えられていると分析している。最後に、優生思想に対する批判的検討は、これら三つのモメントの否定ではなく、暴力装置化を防ぐ運用の問題であり、キリスト教に代わる他者の尊厳の形而上的な基礎付けの探求が課題であると指摘している。

第6章「ろう文化と障害、障害者」(森壮也)は、アメリカの障害学に影響を与えている「ろう」とはいったい何なのか、「ろう文化」が障害学に何を問いかけるのかを論じている。まずろう者を「日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者」とした上で、「耳が聞こえない」から「ろう」のではなく、そうした外見=身体的条件づけと切り離されたところに、言語的・文化的な「ろう」が成立していることを指摘している。その上で、過度の「ろうナショナリズム(中心化)」が、難聴者や中途失聴者を周辺に追いやるのではという主張に対して、ろう者のコミュニティおよび文化を形成する要素としての言語の重要性を論じている。ろう者は手話という言語により世界の切り分けをしており、言語の問題は中心-周縁という問題ではなく、Aか非Aかというオントロギカルな問題である。両者をつなぐためには、聴者の読み手にわかるように「ろう」を書記言語に直していく作業が求められており、その作業が「ろう文化」を自閉的にせず、「障害学」へつながることを指摘している。

第7章「聾教育における『障害』の構築」(金澤貴之)は、社会のマジョリティを構成する聴者が聾をどのように社会的に構築しているか、特に教育の場に焦点を当てて論じている。まずマスメディアにおいて、手話は聾者同士で使用される言語として描かれるのではなく、聴

者が「聴覚障害者」と通じ合うため、助けるためのコミュニケーションツールとして描かれ、聾が「克服すべき状態」として規定されている点を指摘している。さらに聴者中心の専門家・教育者によってもたらされた口話法による教育も、聾やしゃべれないことを否定的に見る聴者の価値観によって擁護されてきたのであり、手話は口話教育を障害する要因として禁止されてきたと述べている。そして近年の口話教育の変化もまた、聴者の価値観に基づいており、聴者により「障害」が構築され続けていると論じている。

第8章「異形のパラドックス」(倉本智明)は、障害者の社会参加を阻む社会的障壁を除去することを障害者運動の課題と見る「平等派」に対して、障壁がなくなっても健常者とは異なる身体が残る以上、この独自性に目覚め、そこを出発点とする「差異派」の主張を取り上げ、障害をポジティブに語ることの可能性を論じている。まず、日本脳性マヒ者協会青い芝の会の思想と行動を取り上げている。青い芝の会は、1960年代後半から70年代にかけて、障害者の内なる「健全者幻想」と闘い「脳性マヒ者としての真の自覚」を求める運動であった。「健常者文明」への参入を求めるのではなく、これを否定し、脳性マヒ者の身体とその行為にポジティブな意味を与える文化、コミュニティを創造しようとした。青い芝の運動自体は、新たな文化の拠り所を明示できないまま求心力を失ったが、今日では「運動」という枠を超え、さまざまなかたちでの文化への取り組みとして深化されている。その例として、障害者プロレス「ドッグレッグス」と「劇団態変」を取り上げている。最後に、「差異派」の課題を二つ提起している。一つは、健常者による一方的な差異化=意味化の不当性の告発である。この点では、「ドッグレッグス」や「劇団態変」は、青い芝

の活動を方法的に革新したと言える。もう一つは、抑圧された意味の顕在化=オルタナティブな価値の創造である。そしてこの課題に答える試みとして、「劇団態変」が障害者の差異化する身体の上に主体的な意味を構築しようとしていることを評価している。

第9章「歴史は創られる」(花田春兆)は、歴史と文学の分野における障害学の可能性を論じている。『古事記』のヒルコ、七福神、福助、クエビコなどの神話や伝承文学に登場する障害者が、「まろうど」(稀人)として扱われていたとの指摘や、さらに物語の語り手の多くが琵琶法師などの障害者であったことによる影響、近世の文学にも多くの障害を持ったヒーローが登場していることを語り、歴史や文学の分野における障害学の取り組むべき課題を指摘している。

第10章「障害学から見た精神障害」(山田富秋)は、精神障害における「固有文化」の可能性を論じている。まずこれまでの精神医療の隔離収容がもたらした問題を論じ、その上でイタリアの精神医療改革を例に挙げながら、「医療モデル」から「社会モデル」に転換することの意義を述べている。最後に、作業所やセルフヘルプグループが医療や常識のスティグマに対抗する可能性があることを指摘している。

3 「障害学」が投げかけたもの

本書において「障害学」が問いかけた視点は何だろうか。それは「あとがき」で触れているように「障害の文化」の持つ意味であると思われる。近代の平等主義は、障害者に健常者と同等の機会的平等を保障し、健常者社会への統合化を推進しようとする。しかし統合化された社会に待ちうけている価値基準は、障害者を排除してきた能力主義に他ならない。よって「障害の文化」を豊かにすること、差異に意味を与え返すことが障害者の存在証明に欠くことができ

ないという主張である。しかし差異を主張しつづけることは、単なる既存の価値への破壊の論理に留まりかねない危うさも有している。8章で倉本が述べているように、不当性の告発に終わらず、新たな価値の創造ができるのが、最も重要な課題であろう。さらにいえば、2章で石川が述べているように、差異に価値があるという主張は、とすると差異の縮小や克服を目指す障害者への社会的支援と矛盾することになる。バリアフリーなど共生のインターフェース作りに対して拒否し、孤立主義に向かってしまえば、不当性の告発すら共感を得られないものになる。「障害学」はまだ始まったばかりである。最初から答えの用意されている学問はない。本書で提起された数々の論点はこれまでも多様な場で論じられてきたことであるが、ようやく「障害学」という共通の場を得て、相互の連関を持つ問題として論じられるようになったのである。

評者は、「障害学」が脱却すべきと論ずる既存の学問「社会福祉」に身を置いている。本書の中での「社会福祉」のとらえ方は、あまりにもステレオタイプに規定されている観があるが、「社会福祉」が障害者のすべての問題を取り扱うという錯誤がこの業界にあることも否定できない。「社会福祉」という制度が有している権力性を考えるならば、より謙抑的にならざるを得ないであろう。障害者を保護し、パターンリスティックにすべてを代弁する専門家の学問であってはならないのである。誤解を恐れずに言えば、「社会福祉」は、社会がどこまで他人の生に関わることができるのか、関わるべきなのかを探求する援助者の学問である。そして援助する立場の障害者を含む援助者の論理を探求する過程において、「障害学」と切り結ぶことができるのではないかと。読後にそうした感想を強く感じた。

(石川准・長瀬修編著『障害学への招待』明石書店、1999年3月、321頁、定価本体2800円＋税)

(いわさき・しんや 法政大学現代福祉学部専任講師)

色摩力夫著
『フランコ
スペイン現代史の迷路』

評者：川成 洋

スペインのフランコ(1892~1975)といえば、ヒトラーやムッソリーニと並ぶ「ファシスト」というのが通り相場であるのだが、彼をファシストと断定するのはいささか無理があるのではあるまいか(もっとも、「ファシスト」という用語を政敵を誹謗するための侮蔑用語ではなく、厳密に定義しておかねばならないが)。また「独裁者」としてもフランコは、後二者と比較すると、毀誉褒貶を含め、かなり小粒な感じが否めない。

かく言う私も、実は、「フランコのスペイン」を体験したことがある。私がはじめてスペインの大地を踏んだ1969年、たまたまマドリードの闘牛場に行ったとき、タイミングよくというべきか、フランコの闘牛見物とかち合ってしまった。正門のゲート付近は、厳めしい武装警官や治安警備隊、それに騎馬警官たちでぎっちり固められ、さらにその外側は取り巻き連中で埋め尽くされていた。蟻の這い出る隙もない、とはこのことだったのか、と思ったり、「フランコをピストルで射止めようとしてもその射程距離に入れない」と何かの本で読んでいたが、実

にその通り、と妙に納得したものだ。

それにしても、連日連夜のサイレン。パトカーや装甲車、護送車のサイレンが鳴り響いていた。それも四方八方から聞こえてくるのだ。東京でパトカーのサイレンには十分慣れていたはずだったが、マドリードのそれは比較にならない。ヒステリックな感じがした。それに、市内のいたるところに武装警官や治安警備隊員が目を光らせていた。

そのうち、マドリードで知りあった人が私に助言してくれたのだが、スペインでの唯一のタブーは、独裁者である「フランコ」という言葉なのだ。たとえ日本人同士のあいだでの日本語でも「フランコ」という言葉が私服警官に聞かれたら、独裁者を誹謗・中傷した容疑で直ちに連行されてしまう。また、公安当局が使っているデモ隊排除用の放水車の放水には青い塗料が混入されていて、その青い塗料は一度皮膚や衣類に付着するとなかなか落ちないので、デモ参加者は翌日でも逮捕されてしまう。しかも、放水車はどこからくるのか、どこから放水するのか見当すらつかないので、デモに近づかないように、との忠告であった。また、市民であれ、私のような旅行者であれ、夜間（多分、11時頃以降だったように思うが）帰宅する場合、自宅やピソ（マンション）の自室の鍵をもっているも、自分で鍵を使って開けることができない。必ず「セレーノ（sereno）」と呼ばれる「夜警」の老人をパンパンと手を打って呼んで、ドアを開けてもらう。セレーノは、自分の担当する地区のすべての鍵をもっていて、ガチャガチャと腰にさげた鍵の束の音をたてながら、やってくるのだ。もちろん、こうしたセレーノは、公安当局と通じているのは言うまでもない。

そういえば、かつて色川大吉氏が、スペインを「眼また眼の国」と言った（『ユーラシア大陸思索行』、平凡社、1973年）が、まさしくそ

の通りであった。要するに、フランコはスペインを「中世の異端審問の国」に逆戻りさせたとか、「監獄の国」に変えてしまったといわれるのも、故なしとしないのである。

ところで、フランコは言うまでもなく、スペイン内戦の張本人である。わが国でのスペイン内戦関係書は、内戦文学をも含めると、それぞれ汗牛充棟ただならぬというべき程であるが、フランコに関しては、何故か、本書を含めて、わずか3冊しかない（ホアン・アララス著、坂本静雄訳『フランコ将軍』ヤングメン通信社、1942年。フアン・ソペーニャ著『スペイン フランコの40年』講談社現代新書、1977年）。

ともあれ、83歳で病死するまで独裁者であり続けたフランコは、本書も指摘しているように、実に謎の多い人物であり、「スペイン現代史の迷路」ともいうべき存在である。

いかにしてフランコが内戦勃発（1936年7月）から、死の床に伏したまままで権力をほしいままにできたのであろうか。

それには、内戦の緒戦段階からライバル、もしくは先輩たちが次々と姿を消してしまったこと、フランコ陣営の諸々の勢力を拮抗させ、相互に牽制させ、そのバランスの上にフランコ自身が屹立したこと、強力なライバルの台頭を事前に摘み取ってしまったこと、第二次大戦期にヒトラーのスペイン直接介入を阻止し、中立を維持することで連合国側とのバランスを取っていたこと、戦後は東西の冷戦の真只中で反共チャンピオンとしてアメリカとイギリスの両国から認知され支援を受けたこと、地中海というスペインの地政学的利点が再認識されたことなど、フランコ個人の持前の「巧妙な慎重性」といった「才能」もさることながら、スペイン内戦以降の時代の流れがフランコに有利に働いたという「幸運」に恵まれたことも事実である。

こうしたさまざまなフランコの時代の節目ご

との対応のなかで、反フランコを標榜する勢力ですらフランコの業績として認めざるをえないのは、1940年10月のフランスのスペイン寄り国境の町エンダヤで行なわれたヒトラーとの「エンダヤ会談」であろう。よく知られているように、スペイン内戦の勃発時点で、軍事クーデタが頓挫しかかったとき、フランコはヒトラーから兵器類と兵員の援助を受け、それでフランコの指揮するアフリカ軍をスペイン本土に移送できた。つまり、ヒトラーの膨大な最新の兵器類の援助、訓練済みの兵員の支援なくしては、フランコは内戦に勝利できなかったのだ。そのヒトラーが、今度はフランコに支援を申し入れるのは当然であったろう。すでに英領ジブラルタルの攻略である「フェリクス作戦」を策定していたヒトラーのスペイン介入の提言を、フランコは事もなげに拒否する。それも「イスラム教の祈禱僧」のように感情の起伏がなく弱々しく単調な口調だった。9時間におよんだ「エンダヤ会談」の終わり頃に、ヒトラーはイスから跳び上って、これ以上の議論は無用だと叫んだという。おそらく、フランコ陣営の作り話だと思うが、後にヒトラーは、あのような苦い体験（フランコとの「エンダヤ会談」）をするくらいなら、歯科医に行って歯を3、4本抜いてもらう方がいくらかましだ、とムッソリーニに漏らしたという。

結局、「エンダヤ会談」はフランコとヒトラーに明暗を分けたことになる。その典型的な評価を二つばかり挙げておこう。

「フランコは満足し、安心しきって、一方、ヒトラーは激怒し、欲求不満のまま、エンダヤから立ち去った」（ブライアン・クロジャー『フランコ 伝記』1967年）

「戦争に関して、フランコはヒトラーよりもはるかに明るい、ということを明確に認識している。結局、フランコはプロフェッショナルで

あり、ヒトラーはアマチュアであった」（J. W. トライサール『フランコ ある伝記』1970年）

ヒトラーが切齒扼腕しフランコがほくそ笑んだ「エンダヤ会談」の結末に、最も安堵の胸をなで下ろしたのは、1713年以来ジブラルタルを占領してきたイギリスのチャーチル首相であった。かくして、第二次大戦期に「中立」と「非交戦」のあいだでバランスを取りつつ、連合国側への接近の切り札を入手することができたのである。もちろん、この「エンダヤ会談」が、スペインにおいて、フランコの英雄的な大胆不敵さの恰好の証左として、まことしやかに伝えられ、第二次大戦期の「フランコ神話」の一つに祭りあげられたのだった。

結局、政治家として、また軍人として、傑出していたかもしれないが、「面白くもおかしくもない秀才」であったフランコは、単なる古色蒼然たる保守思想の持ち主であり、単純素朴な現実主義者だった。それに、本書によるとフランコは、ガリシア地方の農民に特有の「レトランカ」を持っているといわれたことがある。これは馬につける「尻帯」のことであるが、しばしば「ブレーキ」の意味に転用され、「しぶとくて抜け目なく、なにごとにも本心を明らかにしない」という実利感覚を表現している。フランコは紛れもないガリシア人であった。

フランコの生涯にわたって一貫して流れていたのは、スペイン特有の「ラテン気質」とは全く無縁の、慎重さを旨とする「ガリシア人氣質」だったのであり、それになによりも「イスパニダー（スペイン的統一性）」を重視する頑な「ナショナリスティック信念」だったのであるまいか。でなければ、あれほど長く「独裁体制」を維持できなかったはずである。（色摩力夫著『フランコ スペイン現代史の迷路』中央公論新社、2000年6月、349頁＋税）

（かわなり・よう 法政大学工学部教授）

林 宥一著

『「無産階級」の時代』

近代日本の社会運動』

評者：梅田 俊英

本書は、荒川章二、林宥一らによって1990年に発足した「近代日本社会研究会」による研究の産物のひとつである。「シリーズ 日本近代からの問い」の一冊として本書は刊行された。ソ連が崩壊し、20世紀が終末を迎えるにあたって、「現在がどこにあり、どこに向かっているのか」への関心は強まっているが、歴史と未来に対する不透明感がひろがっているなかで、「日本近代からの問い」シリーズは刊行された。まず、歴史から現代を照射しようとする視点を評価しておきたい。

本書は、そのシリーズ第4冊目の著書である。本書の構成は以下の通りである。

第1章 階級社会状況の成立

第2章 無産階級論の諸相

第3章 無産階級運動の構造

第4章 階級の成立と地域社会 - 労働・農民運動組織化とその影響

ところで、本書の著者林宥一は、1999年8月、本書脱稿の準備中に急逝された。哀悼の意を表したい。そのような事情で、本書は「近代日本社会研究会」のメンバーの一人である安田浩によって編集がなされた。その経緯は、本書の安田「編集解題」に述べられている。それによれば、第3章半ばまでは著者の原稿はほぼできあがっており、第4章は既成稿によって本書は形成された。すると、第3章後半が完成しておら

ず、そこで編集者によって著者のいくつかの既刊論文から各部を抜き出し編集されて、本書は完成したのである。

そのせいか、本書第1章、第4章は著者の主張が鮮明で共感できる部分が多々あったが、第3章はいささか食い足りないと感じさせた部分もあった。本書の内容を検討しよう。

2

まず、第1章では「無産階級」という用語について検討されている。この用語は、だれでも知っているように、現在は死語にあたる。これは「両大戦間期に特有の歴史的用語」だったのである。つまり、「第1次世界大戦後における「無産」や「階級」という文字の氾濫は、所有（有産）と非所有（無産）の懸隔が同時代の人々の生活と意識にきわめて重要な位置を占めていた」（22頁）のである。評者も、両大戦間期の社会運動の勃興を重視してとらえる一人である。「日本近代からの問い」はまさにそこにある。著者が「「階級」は、この時代の人々にとって観念や理論以前のものだった。それは、何よりも眼に見える衣食住の生活全般の問題であり、職業や居住地の差であり、さらには体格や顔や手のちがいや、心理・感情・趣味・娯楽の差をもたらすものであった。これらすべての差異を総合するものとして「階級」という言葉があった。つまり「階級」は何よりも即自的で、実体的・可視的な概念だった」（24頁）と賀川豊彦に即して総括される著者に大いに共感を覚える。このような立場から著者は日本資本主義論争にも若干言及される。それには旧来の論争史にはない、「肉声」の言説を聴くことができる。労農派などは「資本主義化の必然性という方向でのみ考えられており、農業・農民問題の独自性・特殊性を認識するという視点はなかった。それゆえ、彼らにとって小作農民問題は、

本質的には労働問題のうちに一体化されるべき性格のものであった」(40頁)という。おそらく、この批判で分かるような視点が著者のもっともベースとなるものといえよう。つまり、農業・小作問題の特殊性と、そこから生じる農民運動の独自性を重視する視点である。本書への、小作農の子たる評者の個人的な共感はそのことから来るのかもしれない。

第2章において、山川均、大山郁夫、吉野作造、長谷川如是閑の無産階級論が検討されている。山川においては、労働運動と農民運動との同質性を「ことのほか強調」(48頁)するものとして批判されている。その上で、如是閑においては「民衆の心性に最も近づきえた思想家」(74頁)と高く評価されている。ただ、如是閑の社会運動への具体的接触・関与が山川、吉野、大山らと比べて「最も希薄」(73頁)だったかどうかには、異論がある。大山が香川県から出馬したときの応援活動は言うまでもなく、1930年『批判』刊行前後の如是閑もかなり実践的ではなかっただろうか。この頃、如是閑は唯物論研究会の会長に推されている。彼の身近なところに当時共産党に入党した柳瀬正夢がおり、左翼知識人とのルートがそれなりに存在したと思われる。33年末、如是閑は「共産党資金として百余円を提供した嫌疑」で検挙されている(拙著『社会運動と出版文化』参照)。これは、特高のねつ造ではあったであろうが、当時の如是閑が左翼にかなり近いところにいたことは疑いない。

第3章では、主として農村社会運動と都市社会運動について検討されている。このなかで、ひたすら強調されるのはその両者の差異である。「大衆民主制の農村的形成 = 農村民民主義との比較でみると、1920年代の都市民主主義・産業民主主義形成の歴史的動力は脆弱であった」(127頁)と評価されている。ここまで、明

瞭に言い切れるかどうかはおいておきたいが、実感としては首肯できる面がある。小作農と労働者の存在形態に一般的な差異があったことに賛成するからである。つまり、農民は「職住一致」の存在で、平たく言えば、紛争や争議が起こっても逃げも隠れもできない人々であった。小作料値下げ要求はまだしも、20年代に頻発した「立禁」への反対、土地取り上げへの抵抗は深刻なものであったのである。それに比べれば、「労働者」は職を辞めればただの人となる存在といえよう。

第4章において、労働・農民運動が組織化されていく過程とその影響について検討されている。そのなかで、労働者においても「下層社会」に閉じこめられていた存在から「国民の一員たる諸権利への自己主張を強め」(166頁)ていくとされている。それにもかかわらず、「地方自治への影響と関与度は、農民運動勢力の方が労働運動のそれよりもはるかに大きく深かった」(171頁)ことが強調される。こうして、この2つの運動は「異質性を内包し、二元的構成」(200頁)を持っていたとされつつも、なお「無産階級」という用語が氾濫したように「所有と非所有」の区別が同時代の人々の生活と意識に重要な位置を占めていたと結論されるのである。

3

労働運動と農民運動の差異についての指摘は著者も論究されているように、既に西田美昭氏らによって提起されていることである。本書の独自性はそれに基づきつつ、その差異を社会構造分析の上で検討しようとしたところにある。とはいえ、農村社会構造だけでなく、20年代労働社会の構造分析をもおこなえば、別の面が見えてくるかも知れない。20年代は小作争議が頻発しただけでなく、中小労働争議が頻発し

た時期でもあった。大原社会問題研究所によって刊行されたマイクロフィルム版の協調会資料『日本社会労働運動史料集成』（柏書房より2000年9月刊行）に含まれる、協調会労働課ないし情報課によって克明に中小「労働争議」が記録された文献などを検討すると、何らかの新たな歴史像を再構成できるかも知れない。本マイクロフィルムには紡績・製糸工場は言うまでもなく、製材、印刷、自転車部品、硝子、新聞販売店その他ありとあらゆる業種に発生した労働争議の記録が収録されている。従来よく知られた

野田争議、浜松楽器争議などだけでなく、膨大な中小業種の労働争議・紛議について分析を加える必要がある。とはいえ、著者は既に他界された人である。それは残された我々のなすべき課題と言わねばならない。

（林宥一著『「無産階級」の時代 近代日本の社会運動』青木書店、2000年6月、239頁、定価2,300円）

（うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

法政大学大原社会問題研究所叢書 ◯好評発売中◯

証言 産別会議の運動
●占領期の日本労働運動史・労使関係史の基礎資料
 法政大学大原社会問題研究所編 A5判・三九〇頁・六五〇〇円
 産別会議の運動家の証言から産業民主主義の展開や経済再建との関連を視野に入れた労働運動史・労使関係史の解明。

証言1 印刷出版労組の結成と運動……杉浦正男
 証言2 電産一〇月闘争と電産型賃金……足立長太郎
 証言3 新聞単一の結成と二・一スト……川添隆行
 証言4 産別民同がめざしたもの……三戸信人
 証言5 経済復興会議の組織と運動……中原淳吉
 証言6 三菱重工下丸子労組の結成と活動……山崎良一
 証言7 日特管労組の活動と城北労協の結成……小林栄一郎
 証言8 労働戦線の創刊……佐藤茂久次・松尾洋

現代の韓国労使関係
●日・韓の工業化・近代化の時期と速度の違いを踏えた比較研究
 法政大学大原社会問題研究所編 A5判・三六〇頁・六二〇〇円
 企業別から産業別組合形成をめざす韓国労使関係を「民主労総」等の調査を踏え法改正・労働市場・産業構造等多面的に分析。

政党政治と労働組合運動
●革新政治と労働組合運動の今日的課題を提示
 五十嵐 仁著 戦後日本の到達点と二十一世紀への課題
 A5判・四六〇頁・六〇〇〇円

社会運動と出版文化
●「社会史」の方法から見た社会運動史
 梅田俊英著 近代日本における知的共同体の形成
 A5判・三六〇頁・五〇〇〇円

近代農民運動と政党政治
●普通選挙の実施という新たな政治条件下の農民運動
 横関 至著 農民運動先進地香川県の実態
 A5判・三三〇頁・五〇〇〇円

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
<http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo/> ▶価格は税別◀